

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年7月22日
第21号

戦後80年 未来への伝言



双葉歴史探偵事務所
□8□

嶋谷節夫さん（元高校教諭）から託された3冊目の本が鳳儀萍さんの手記（下写真）だ。2009年中国人受難者全道慰霊祭実行委員会が発行。嶋谷さんが編集された。

北海道・角田礦 中国人強制連行・鳳少年の証言



栗山町字日出・新二岐墓地「中国人殉難者墓前」にて
左より足永、富樫、鳳の各氏。右は、法隆寺草間住職

2006年8月7日、栗山町で中国人受難者供養会が行われたときの写真。右から2人目が鳳儀萍さん。

仲間を守られて
僕は地獄を生き抜いた

戦時中、中国から強制連行され、栗山町角田礦で過酷な労働に従事させられた鳳儀萍（フオン・イービン）さん（当時14歳）の手記から学びたい。

二人の少年は見えていた

角田に連行されるまで

一九四四年、14歳の鳳儀萍少年は中国・上海で日本人に捕らえられ、北海道栗山町角田礦に連行された。途中、海に突き落とされた者もいた。船酔いと欠食、貨車による長い移動、ようやくたどりついた所は小さな谷間にある従業員三百人に満たない炭礦であった。

地獄のような日々

日本軍によって侵略された中国本土の生活も食糧の不足、戦乱による街の荒廃があり、連行された人たちの体力も著しく低下していた。一九四四年十月四日、角田礦の共栄寮に収容されてからも暴力による酷使と食糧不足、冬の寒さ、病魔、ガス突出による死亡、崩落事故による無残な死、絶望のあまりの自死、暴力による虐殺など、翌年八月十五日終戦まで次々と仲間が死んでいくのを見ていた。それは日本に拉致されなかったら起こらなかったことであると、鳳少年は一人ひとりの名を小さなノートに記録した。

六十年前の体験を発表

奇跡的に生きて中国本土に帰ることができた鳳少年は勉学に

励み医者になった。六十数年の年月は流れ、彼は少年の頃の記録を、上海抗戦記念館に『生死の記録』として贈り、また口述した『雪没北海道』を中国で出版した。

富樫さんの自戒の念と決意

鳳少年が地獄を見ていた時、富樫少年（12歳、炭礦創業者の孫）も毎日のように焼き場で遺体が茶匙にふされる煙を見ていた。約三百名のうち98人が一年間で死んだ。移動中にふらふらと倒れる者、酷寒の中、ボロボロの服ではだし同然で雪上を歩くのも、日本人監督が動物を追うようにムチを振り上げるのも当然のように見ていたという。故郷の忌まわしい事件をいつも心のどこかに引っかかりながらも、遠い過去のこととして忘れようとして、六十数年の時が流れた。

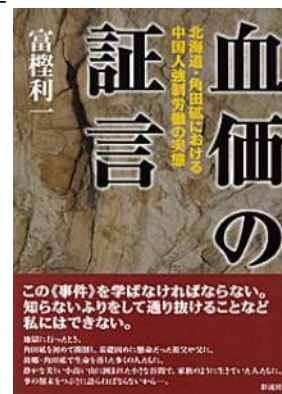
だが、鳳さんが中国で健在であり、「生死の記録」を残して、日本を訪ねて栗山町の墓参の意志を強く持っていることを知った以上、鳳さんと連絡を取り、来日の準備をする決意をしたと富樫さんは語っている。

涙を流しながら翻訳

鳳儀萍さんの手記を翻訳した足永昭さん（北海道出身、上写真左端）は都立高校（定時制）の英語科教諭だったが、中国残留孤児の子どもと接する中で中国語を独学で学ぶ。旧満州を旅行し日本の中国侵略の歴史を心に刻んだ。中学校時代の恩師、富樫利一さんの依頼で鳳さんの手記を2年かけて翻訳、その間に2度、鳳さんに会っている。

角田炭礦創業者の孫
富樫利一氏（写真左から2人目）

鳳氏の存在を新聞報道で知り、強い責任を感じて連絡を取った。手紙の交換、インタビュー、各種文献からこの本を世に出した。



富樫さんの言葉（室蘭民法08・6・10）「日本国家が閣議決定をして、中国人三九三三九人を強制連行し、一年間に六八三〇人を死亡させた事実から、日本政府も企業も逃げることはできないし、これまで知らぬ顔をしていた私は過去の歴史を自虐と主張する者たちと同じ存在であったのだと自戒の念がふつふつと湧いてきたからである。黙っていたら風化は寸前であると強く感じたのである。」

正義・公平を基底に据えた中国人強制連行・労働の損害賠償請求の裁判の弁護人の主張を否定した者は皆無であったはずだ。時効と「日中共同声明」による賠償の放棄という日本側の一方的解釈による最高裁の判決は、司法の場での解決ではなく政治の場にこの決着の方途を示したことは確かだ。（中略）

日本は加害の事実を近現代史に明確に位置づけ、謝罪し、基金積み立てによる賠償をしなければ世界に顔向けができないことを強く感じている。過去の歴史を直視し、未来を築く努力をしなければ、真の日中友好はできないことは確かなのだ。」

中国人強制連行・強制労働

第二次世界大戦中、日本政府と日本の企業が共同して、中国人約4万人を日本国内各地に強制的に連行し、多数を死傷させた。福岡では福岡県内の炭礦（三井、三菱）に強制連行された被害者が国と両社に対して謝罪と賠償を求めている。

朝鮮人の強制連行

一九三九〜四五年までの間、朝鮮から日本本土に強制徴用された労働者は推定72万人に達している。また、中国からも約4万人が主として華北から日本本土に移送された。「募集」や「官斡旋」で連れてこられたことになっているが、その実体は拉致と同じだったケースが多い。彼らは炭礦、鉱山、土木工事などに従事させられ、労働条件は劣悪であった。脱走や暴動も起こったが、失敗すれば見せしめのリンチを受けた。こうして朝鮮人6万余人、中国人7千人が死亡

したと言われる。（小林英夫「日本のアジア侵略」山川出版社、外村大「朝鮮人強制連行」二〇一二年、岩波新書）

「記録し生きて持ち帰れ」

鳳儀萍さんの手記から

費度、山優良、この二人は強制連行された人たちの実質上のリーダーとなる。

元小学校教師であったが、日本軍の大陸侵略後、戦乱の中で八路軍に入った軍人であった。前線で戦っていたが後、教宣活動と任務としていた。山優良が負傷後、衛生看護を担当、費度と共に私服で上海市街に薬品を求めて潜入した所を日本軍に捕らえられ拉致されたのであった。二人の知識と指導力は連行された仲間にも尊敬される所となり頼られる人物となっていた。鳳さんが中学生であることを知った二人は鳳さんに連行の状況を記録することを勧めたので

ある。

「君はまだ若い。連行された者の氏名と住所を聞いて記録することだ。どんな事でも良い。そしてそれを持ち帰ることだ。戦争は必ず日本が負ける。それを持ち帰れば『血価の証言』となる。必ず生きて帰ることが君の使命なのだ。」

二人に諭された鳳さんは小さなノートに秘かに記録し続けたのである。

しかし、二人の死後、また兄のように優しく、厳しい労働の時も、悲しみの慟哭の時も庇ってくれた劉阿三が死に、さらに自殺者が続出した時、絶望のあまり自らも死を選ぼうとした。その時、鳳さんを励ましたのが「記録し生きて持ち帰れ！」の言葉だったと言う。そして記録することが自分の生きる力となったことを知ったのだと言う。

強制連行された者たちの実態

が細かに記述されたのも、この「生死の記録簿」を元に抜群の記憶力で口述が可能となった。

《手記の後半から》
ガス突出で11人が犠牲に

石炭の採掘量を増やそうと焦る日本人の現場監督・中村はガスを突出させてしまう。助けに行った山優良を含め11名の尊い命が一瞬のうちに奪われた。中村監督は救助を押しとどめ、現場を密封しようとした。だが、劉阿三らの中国人は身の危険を顧みず全力で救助にあたった。

遺体を宿舍入口に運んだ後、費度はストライキをすると言言、皆が従った。受難者を乗せた台車を押しながら「人を殺した者は、命をもって償え！」「血債は血をもって返済せよ！」みな声をそろえて叫んだ。さらに待遇改善を求め、日本人との交渉に及んだのだが、最終的にリーダーの費度は連行され、拷問を

受けて、晒し者にされ、命を落とした。

劉阿三の死と鳳さんの危機

費度に食事を与えようとした劉阿三も見せしめに鉄鉤で費度の隣に吊された。心身共に強い劉阿三はこの危機を乗り越えたのだが、作業中の落盤事故で仲間をかばい腰の骨を折る大けがをしてしまう。だが、これが致命傷となり、治療も受けられず、命を落とす。鳳さんは号泣した。癒えない心の傷が残った。ある日、監督の中村が鳳さんにあらぬ言いがかりをつけ、手斧で指を叩き切ろうとした。鳳さんは左手中指が落ちそうになる傷を負った。中国人の仲間がかばってくれた。ちょうど通がかかった炭坑夫の福田さんが彼を診療所に連れて行き、治療を受けることができた。幸い指は切断せずに済んだ。その後、福田さんは鳳さんのけがを案じ、食べ物を差し入れ

一九三四年、角田炭礦（選炭場と専用鉄道）栗山町所蔵



小樽でも高島特攻艇の基地建設には朝鮮人が強制労働させられていたことが地元の人の間に伝わっている。だが、基地については軍事機密であり、また敗戦により強制連行・労働について軍事裁判にかけられることを恐れて、資料はことごとく処分されている。同様のことが角田炭礦をはじめとする事業所についても言えることが文献を読んでいくうちにわかってきた。

データから学ぶ「強制連行」

中国国内の強制連行・就労者数（1942年）

満州鉄道	300万人
東北	360万人
満州	230万人
モンゴル	25万人
坑山	17万人
華中	5万人
華南	100万人

中国社会科学院近代史研究所研究員 居之芬氏講演より（2006年5月10日 室蘭市）

※日本への強制連行は中国本土内の1千万人の強制連行の末期に行われた。名目上は中国人の組織であったが、日本軍が支配し、日本への連行も当然のごとく実施された。

第二次世界大戦日本捕虜中国人勞工口述史『雪に埋れる北海道』（鳳儀萍氏）

中国人強制連行の企業・作業場・人数
日本国内 35企業 135作業場 38,935人



北海道 19企業 58作業場 16,282人
石炭業界 24作業場 8,515人

※北海道は冬の厳しい気象条件の下、落盤やガスの突出など危険な炭鉱での労働に従事させられた。日本政府と企業は大出炭を目標に長時間労働を強制しながら、生活条件である食も衣も住も満足なものを与えなかったから、飢えと病気が続出した。

北海道の死亡者数 3047人（死亡率18.7%）

「腹を立てないように自分を整えなさい。それがイチバンヨロシイ。そうやって私は角田から生きて帰り、医者になったのですから。」(鳳儀萍さん)

に行った。だが、タイミングの悪いことに、そのとき鳳さんはノートを付けているところを監視員に目撃されてしまう。ノートを取り上げられ、激しい折檻を受けた。「侮辱されることにもう耐えられなかった」。鳳さんはベルトを鴨居に括り付け、首を突っ込んだ、そのとき、仲間に抱きかかえられ、一命を取り留めたのだった。様子がおかしいと気づいた谷三義らが追いかけてきて、間一髪で救われた。我にかえった鳳さんは、二人の先生が自らの命と引替えに「生死記録冊」を付けることを自分に托したことを思い起こした。何が何でも生き続けなくてはならない。だが、左手中指を見ては涙ぐんでしまうのだった。

暴力、飢餓により犠牲者増

「毎日が夜も昼もない暗闇の中なのだ。まだ夜の明けぬうちから叩き起こされ、満身創痍を檻樓に包むや、すぐ地底に追われる。停まった時間の中で、耐えねばならぬ謂われなき責め苦の数々……。だから「ヤスメ！」の声を合図に夜の地上に這い出し、新鮮な空気を吸ったとき、「またなんとか一日、乗り切った」と、誰しもがそう言って溜息をつくのだ。」

五月になると、電力、火薬が不足し、労働時間が短縮された。だが、五月に六人、六月に七人、

七月に九人の仲間を亡くした。九月十五日、米軍により解放。この日、一同は集められ、米軍人から日本の敗北と強制労働させられていた者たちの解放が宣言された。

米国人はそこが強制収容所、監獄であると納得し、話を聞いて記録を取った。鳳さんは通訳として活躍した。

中国人に食糧や衣類、小遣いが支給され、人間らしい生活を取り戻していった。日本人の現場監督は報復を恐れ、姿をくりました。

十一月二十日、一団は角田を発ち、三日かけて福岡に移動し、十二月に入り、船で上海へ帰国した。

母の死に打ちひしがれる

鳳さんはフェリーや汽車に乗り継ぎ故郷の家へと向かった。消息不明の息子を心配し続けた母は床に臥していた。三週間も経たないうちに息を引き取ったのだった。悲嘆に暮れる鳳さん、一週間、飲まず食わず、ただ泣き続けた。山優良、費度先生のことばが聞こえてきた。甥たちも心配して声をかけた。

中学への編入、医学部へ

何から始めてよいか、見当もつかなかったが、二年遅れて中学校に編入した。5時から11時過ぎまで勉学に打ち込んだ。独学で高校課程を修め、大学で医

学を学んだ。咳が出て、炭塵まじりの痰を吐くこともあった。大学を卒業後、医師として活躍する中、地獄の体験を綴る計画は先延ばしされた。

文化大革命の混乱

一九六八年、日本にいたことを理由に、暴力を暴力を伴う尋問を受け、スパイ扱いされた。「生死記録冊」は持ち去られ、最初の二頁が破られ、七年後に戻ってきた。鳳さんの連行の記録が消されたのだ。降りかかった災厄は妻子にも及んだ。

角田炭礦受難者名簿で汚名返上

一九七八年、中日平和友好条約発効。翌年、日中友好協会に書簡を送ったところ、角田炭礦受難者名簿が送付されてきた。鳳さんはこの名簿を党書記に見せ、汚名返上の道を拓くことができた。

中国人の視点から日本の戦争責任を問い直す

(編集部)

見えない差別意識

鳳さんの手記を読み、日本人現場監督たちの凄まじい暴力に言葉を失いました。なぜなのかを考えました。富樫さんの回想も参考になりました。他民族への差別が刷り込まれていたのではないかと。14年に及ぶ中国侵略戦争、三光作戦(焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くし)、数々の虐殺、爆撃、中国大陆での連行、その延長に鳳さんが巻き込まれた日本への強制連行があったことを教えられます。

イスラエルがガザ地区住民を爆撃、銃撃することも同じことが言えるかもしれません。

個人への謝罪と補償を

「うそをついて外国に連れ出し、休みも賃金もなく働かせ、いまだに謝罪がないんです」と提訴した中国人の方は語る。中国との条約で解決したと言わずに、日本もドイツで創設された「記憶・未来・責任」という連邦基金と同じような基金を政府と企業は創り、謝罪すべきだ。そうしないと中国をはじめアジアの人の信頼を得られない。

二〇〇九年、西松建設(東京)は360人の強制連行を認めて謝罪し、基金2億5千万円を拠出し、原告と和解した。異例のこと、と中国新聞は報道した。

今回、鳳さんの手記を手取ることで、強制連行のこと、日本軍が中国でしてきたことを中国人の視点で捉えることができたことは勉強になった。

鳳さんは一九八二年から一年間、泌尿器外科の専門医として米国の大学で研修する機会を与えられた。その後、中国広州病院に勤務された。

戦争の惨禍を記憶するために

鳳さんは一九九〇年、福岡での慰霊祭(三井三池炭鉱、中国人二千人が連行され、五六四人が死亡)に招かれ、取材を受けた。

二〇〇六年、二〇〇八年には角田炭礦の慰霊祭に参加された。二〇〇六年秋には、連行事件の最高裁判決(三菱マテリアル)を前に抗議行動に参加するため来日していた。企業が遠来の要請団に門前払いをしたとき、通訳の足永さんは情けなく恥ずかしい思いをしていた。そのとき鳳さんは「腹を立てないよう自分を整えなさい。それがイチバンヨロシイ。そうやって私は角田から生きて帰り、医者になったのですから」と慰め戒め

てくれたという。

鳳さんの資料は画期的

編集者 鳴谷節夫さん

鳴谷節夫さんは長く中国人受難者全道慰霊祭実行委員会に所属し、中国人強制連行資料集の発行、慰霊祭の開催に尽力されてきた。鳳さんの記録は資料の第4集として刊行された。

「刊行できたのは、富樫利一さんと足永昭さんの絶大な協力によるものです。富樫さんは鳳儀萍さんを見つけ出し栗山町の供養会に招聘し「血価の証言」を刊行しました。足永さんは鳳儀萍さんから託されたものを命を削る思いで成し遂げました。」

(中略)特にこの第四集は強制連行された本人自身が、秘かに記録し持ち帰り、それをもとに抜群の記憶力で書き上げた全国で全く例を見ない画期的な資料です」と語っている。